

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nskkn.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



《大齋節メッセージ》

誘惑と試練

司祭 ペテロ 井口 諭

大齋節第1主日には「誘惑を受ける」という箇所が読まれます。A年はマタイ福音書4章1～11節、B年はマルコ福音書1章9～13節（イエス、洗礼を受ける）をも含む、C年はルカ福音書4章1～13節を読みます。マタイとルカは、マルコを知り、3つの誘惑の資料を持っていました。マタイとルカは「パンの誘惑」が最初にあり、次にマタイは「飛び降りる誘惑」ですが、ルカは「拝む誘惑」で、マタイの最後は「拝む誘惑」ですがルカは「飛び降りる誘惑」です。マタイとルカでは、2番目と3番目の誘惑が入れ替わっています。マタイは、最後にマルコの「天使たちが仕えていた」を「すると、天使たちが来てイエスに仕えた」とします。

共観福音書であるマタイ、マルコ、ルカのこれら

の箇所に「誘惑」が5回用いられています。マタイは1節に「誘惑」、3節に「誘惑する者」、7節には原文に誘惑の文字が入っている「試しては」があり、マルコは13節に「誘惑」、ルカは2節と13節に「誘惑」、12節に「試しては」を用いています。

誘惑する

者である悪魔が「石がパンになるように命じたらどうだ」と言うと、イエスは申命記8・3を引用して「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と言われます。次に悪魔は「神殿の屋根から飛び降りたらどうだ」と言うと、イエスは申命記6・16を引用し「あなたの神である主を試してはならない」と応えられます。最後



に悪魔は「ひれ伏してわたしを拝むなら：与えよう」と言うと、イエスは申命記6・13を引用し「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と応えます。悪魔の誘惑に対して、イエスはすべて申命記の言葉を用いて退けます。パン、飛び降りる、拝むことは、みな物に通じる誘惑です。イエスは、それらの誘惑をみ言葉で追い払います。

誘惑は、ギリシャ語原文でペイラスモスと言います。試み・試練とも訳せます。誘惑は、悪いことに誘い込むことですから無いほうが良いですが、試練は、困難に立ち向かい克服することですから有ったほうが良い言葉です。文語祈祷書の「主の祈り」には「我らを試みにあわせず」とありましたが、現行祈祷書は「わたしたちを誘惑におちいらせず」としました。

現在の悪魔は、経済を豊かにすると言って金融政策、

財政政策、成長戦略のための外れの三本の矢を放ちました。あの矢は何処に行っただのですか。積極的平和主義と言って武器で平和をつくる集団的自衛権（安全保障関連法）をつくり、紛争地である南スーダンに武器使用できる自衛隊を送り込みました。黙って政府に従うようにと特定秘密保護法をつくり、今また、嘗ての治安維持法のような共謀罪（テロ等組織犯罪防止法）をつくって大日本帝国に逆戻りさせようとしています。声を上げずに黙っていることは、消極的な賛成と受け取られ、パンの力に負けることとなります。イエスは「退け、サタン」と厳しく言われました。わたしたちは、これらのパンの誘惑に負けるのですか。それとも立ち上がり、これらを試練として立ち向かっていくのですか。とても大事な決断です。（清瀬聖母教会牧師、聖フランシス・聖エリザベツ礼拝堂チャレン、池袋聖公会管理牧師）

特集 聖公会のキリスト教教育のミッション（使命）と働き

今回の特集は、キリスト教教育の使命の要でありながら、これまでこの存在が当然のごとくに思われるにとどまり、広く知られることもない「キリスト教教育のミッション（使命）と働き」（幼児教育を含め）について御寄稿をいただきそのあるべき姿を知り認識の共有を図ることを目指すものです。

キリスト教教育を

おこなう学校の使命

司祭 上田亜樹子



1. はじめに
1874年に男子のための「立教学校」を創設したウイリアムズ主教は、女性の教育もまた必須であるとの信念から3年後、女子のためのミッション・スクールも立ち上げた。7歳だった津田梅子が公費留学生としてアメリカへ旅立って6年後、私塾や家庭教師を通して教育を受ける女性も現れ始めていた頃、そしてキリスト教宣教師団体が教会や病院、学校などを苦勞しながら造っていた時代でもある。

ミッション・スクールの目的は「キリスト教教育」であることには間違いない。しかし、それでは「キリスト教教育」とは何を指すのだろうか。知識としてのキリスト教

文化を身につける教育、キリスト教式典に親しむ訓練と捉える向きもあり、またもつと露骨に、未

来の信徒獲得／教勢拡大のための手段、信徒家庭の子どもたちを優遇するシステムと割り切る考え方もあるだろう。しかし、幸福を追求するなら仏教よりもキリスト教の方がお得ですよと刷り込む目的で、また公会の「延命」のために将来の担い手を量産する目的で、ミッション・スクールが「キリスト教教育」を展開するとしたら、それはイエス・キリストの教えに逆行していると言わざるを得ない。

「わたし」を愛し慈しみ、最後の瞬間まで無条件に一緒に歩き続けるイエス・キリストの生き方は、自己保全が目的ではない。また、何かすぐに結果が出るわけでもない。神が与えられた価値感や人間観を、教会を後ろ盾にしながら「最も大切なこと」として訴え続けること、それがミッション・スクー



は客観的な分析ではなく、体験に根ざした心から沸き上る確信のよくなもの。キリスト教教育は、キリスト教の本質を、それぞれの現場に合わせて届ける教育に他ならないと考える。

●愛に根ざした生き方

見返りを求めず、無条件の愛を私たちに惜しみなく注いでくださる神の存在を知ることにより、キリストが身をもって示された「自分を愛し他者を愛する」ことの本質を知る。感謝されるかどうか、周りに受け入れてもらえるかどうか、どのように評価されるかが優るぎない規範を持てるようになること。

●人としての尊厳

文化的知的な生活、心身と霊の健康を保つ日常の権利に加えて、窮地に陥った時に同情や哀れみではなく、尊厳と共に必要な助力を得る権利があることを知る。それは、神が愛されている人々の中に、自分も含めることである。

●ゆるしゆるされることの価値

ルの使命なのではないか。目に見えない愛を見出す力、人としての品格に目をとめるセンス、イエス・キリストが示された自分と他者を愛する力、それらのかけがえのない価値を本気で伝え、成長させるのがキリスト教教育なのではないだろうか。

2. 学校の現実

「チャプレンなんかいつまでもやっていないで、いい加減ほんとの仕事をしたらどうですか」とは、しばしば教会で聞くフレーズである。確かに何をやる役目なのかよくわからない部分があり、謎を解明するこちらの努力も足りないが、従順な子どもたちを相手に、日曜日すら余暇を楽しむ生活を送っていると思われているフシがある。

一方、ミッション・スクールであっても、社会との接点に位置する性質上、内部でのキリスト教の受け止め方は独特である。学校運営のアクセサリーとしての位置から脱出するには、時間もかかるし、世の常識のあたりを受けて、「何かに依存しないと生きていかれない」「きれいごとばかり並べる」あるいはせいぜい「清く正しくしか

人を救すと「負けた」かのよう
に思わせられる社会だが、救せな
い人（自分）であっても、力の限
り出来ることをやり尽くした後は、
神に全てをゆだねることのできる
豊かさや自由さを知る。

聖公会に属する保育園から大学
院までのキリスト教教育を通じて、
実はどんなにたくさん魂が愛に
触れているか、今は誰も知らない。
やがて自立したひとりの人間とし
て旅立っていく時、どのような状
況の中でも決して見捨てることの
ない神の存在を覚えていることで、
困難や痛みを乗り越えて生きるこ
とが出来るよう、祈らずにはいら
れない。

（立教女学院チャプレン）

立教大学のキリスト教に基づく リベラルアーツ教育と展開

司祭 宮崎光



学校生活は、人格形成に大きく
影響し、そこで提供される「教育」
は、どのよ
うな世界を
築いてゆくのかを考え、生きてゆ
く知恵を養うものとなります。立



マリア、エリザベツと出会う

し弱い」人々がクリスチャンであ
り、「善良だが知的でなく頭が堅い」
礼拝屋がチャプレンというイメー
ジも、なかなか払拭し難い。表面
的に調子を合わせつつも出来るだ
け深入りせずに無事に卒業したい、
というのが大方の本音かもしれな
い。学校の現場では、信徒の協力を
得るのもなかなか難しく、「キリ
スト教は善」という前提どころか、
多くのキリスト教用語は通じない。

鵜呑みにしないのは良いことかも
しれないが、オウム真理教や偏つ
たテロ報道のお陰で、宗教＝危険
という図式が定着していることも
あり、目に見えて触ることの出来
る事実や論理的に説明できる内容
以外は、否定するか茶化すのが「科
学的な態度」と理解されている傾
向もある。

それでも、
である。ミッ
ション・ス
クールは、
初めてキリ
スト教に触
れる人々に、
「キリスト教
は、本当は
こうなんです」
「キリスト教の目的
はこういうことなんです」という
ことを、大手を振るって語ること
のできる最前線、目に見えないが
私たちを見守る大いなる存在を証
する機会、周囲の思惑に振り回さ
れずに主体性とヴィジョンに基づ
く人生への促しとなりうる。

3. キリスト教教育は何を伝える のか

キリスト教の本質は愛に根ざし
て生きる実践を伝えるには、ま
ず身をもって示す事からしか始め
られない。自分が立つのも座るの
も、生徒を叱るのも褒めるのも、
愛が動機なのかどうか、当事者は
胸に手を当
てて自分に
聴く必要が
ある。それ



教學院は「キリスト教に基づく教
育」を建学の精神とし、とりわけ
立教大学は、聖書とキリスト教の
思想、歴史、伝統、習慣、芸術な
どもをもって、人間と世界を知り、
考える尺度とする「キリスト教に
基づくリベラルアーツ教育」を標
榜しています。そして、これを具
体的に展開するのが「チャペル」
の活動です。これは大げさな話で
はなく、自画自賛でもなく、一朝
一夕では為し得ない、立教學院の
歴史を通して培われた、継承すべ
き精神的財産であると私は思いま
す。そして何より、ここが日本聖
公会の福音宣教・伝道の発信地、
源泉の一つでもあり、奉職する者
の責任と使命をも感じます。立教
學院初期の歴史を少しだけ紐解い
て、今の姿を検証してみましよう。
C・Mウイリアムズ主教は、
1874（明治7）年2月3日、築
地に聖書と英語の私塾を始め（これ
が「立教学校」の創立）、まもなく
塾生4名と日曜学校を開始しまし

た。教育と並行して礼拝を行い、開塾1年目にして受洗者3名、翌年には洗礼17名、堅信16名を数えます。1882年末の築地居留地移転後の記録によれば、「日曜午前の定期礼拝・説教、金曜晩禱・説教、毎日の短い講義または聖書解釈、さらに定期課程の一部として週3度の聖書の授業への出席」が全学生に義務づけられています（大江満『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』刀水書房、2000年）。当時の国の教育制度に決しておもねることなく、それゆえに不遇な学校運営を強いられようとも、礼拝を中心とした「宗教教育」を貫き、キリスト教伝道機関として



の使命を「立教学校」は確信していたのです。

創立から約140年を経た今も、礼拝を中心とした「宗教教育」は息づいています。池袋キャンパスのチャペル（諸聖徒礼拝堂）では、主日礼拝と日曜学校、金曜夕の礼拝、毎朝の始業の祈りに、「学生キリスト教団体」（9団体）に所属する学生たち（現在約260名）は、主体的に参加し、また奉仕しています。その中から洗礼を受ける人も毎年います。聖職へと召される人もいます（私もその一人）。金曜夕の礼拝は、学生・教職員を中心し約120名が集います。また、学内諸行事も祈りをもって始まる機会が多く、体育会のシーズン前の礼拝、卒業生や地元関係者の集いにも「食前の感謝の祈り」等が、チャプレンに要請されます（そして、会の締めは応援団によるエールと校歌斉唱）。チャプレンは、こうした一瞬の「祈り」の時間さえも伝道の好機として全力投球です。

それは、立教の「宗教教育」としてのチャペル活動に対する、教職員員の理解と受容に支えられ、鼓舞されているからです。ウイリアムズ主教は日本語に熟達していたと伝えられますが、語学力以上に彼は、しっかりと聞く力、正しく伝える力に長けていたと私は思います。主教が学生と真摯に向き合い、その人の存在の深みに出会ってゆく姿勢、それが立教の校風、建学の精神として今に受け継がれているのです。

（立教大学チャプレン）

キリスト教幼児教育の

ミッションとは…

「汝の幼き日に、汝の造り主を覚えよ」

この言葉は、幼児教育に携わるクリスチャンならば、恐らくこの思いを心に抱きながら子どもたちと生活していることでしょう。「神様を知る」とは、どういうことなのでしょう。

クリスチャンホームで育ったのではない私の神様との出会いは、通っていた幼稚園でした。教会とお祈りは、4歳の私にとっては、

もの凄い衝撃でしたし、礼拝堂の静けさに怖さを感じたのを覚えています。そしてお祈り。「…になりますように」と自分のために願う事があっても、お友だちのために、知らない人のためにお祈りをするのは初めての事。「今日ね、お休みしてた〇〇ちゃんのためにお祈りしたんだよ！」と、お友だちのためにお祈りしたことが嬉しくて、得意げに母に話したのを覚えています。そして、数日後、必ずお友だちは元気になって幼稚園に来るのです。「神様は、お祈りを聞いてくれるんだよ！」

そんな

時代から50年以上たったこのハイテクノロジーの今、「神様・祈る」は子どもの心



にどう響くのでしょうか…。

幼稚園に入園してくる子どもは、それまで各家庭で養育されてきた子どもが殆どです。かつての私のように、

入園して初めて出会う神様。幼稚園では毎週月曜日にお礼拝があります。年長児が年少児の手を繋ぎ神様のお家（聖堂）へ行きます。いつもは、戦いごっこを一緒にしてくれるお兄ちゃんが、お家ごっこを一緒にしてくれるお姉ちゃんが手を繋いで、連れて行ってくれるのです。優しい先生もお母さんもいる。いつもとは少し違うこの空間は、何か特別のような気がします。そこは「愛されている者がそこに



んなが感じているような気がするのです。

改めて「キリスト教教育のミッションとは」と考えた時、キリスト教を教える

のではなく、「そのままの

自分が愛されていることに気付き、同じように周りの人を愛せる」それは、神様が私たちにそうしてくださいているからだということに、気付ける心の種を蒔

く事なのだと思えます。その種が芽を出した時「神様のお家」でのことを思い出すことでしょうか。認められ、大切にされてきたことを思い出すでしょう。幼稚園期に神様と出会うことは、後の人生が豊かになることだと思えます。周りの人を愛せるという心とは、感謝の心と、喜びを持った心穏やかな生活を送れることだと思えます。未来を託す子どもが、互いに愛し合い、幸せを感じる事が出来るように、一人でも多くの子どもが神様と出会いますように。そして最後に、長い歴史の中で、キリスト教教育の大切

さに使命を感じてきた保育園、幼稚園、学校等々がこれからも先人たちの思いを胸に、神様と出会い、神様の愛を感じる機会を奪われないように祈ります。

（聖公会八王子幼稚園園長）

「司祭の心」

『ナツエラットの男』

山浦玄嗣著
ぶねうま舎
2013年刊



ケセン語訳聖書で知られる山浦玄嗣のあらたな「物語」です。ケセン語訳福音書は山浦氏の豊富な知識と気仙地方の風土と何より山浦氏に与えられたタレントにより福音書に新たな読みを提示されたことからよく知られていると思えます。東日本大震災の津波被災によって水をかぶった在庫は「お水くぐりの聖書」としても話題になりました。

このケセン語訳聖書の翻訳

の営みから新たに紡ぎ出された本書は、イエスの物語に匂いと風と手触りをまとわせてわたしたちのもとへと運び込まれたようです。文体もさることながら当ではめられていく日本語の言葉遣いに引き込まれます。福音書で記されて

もちろん、著者の独自の

解釈ですからこのままを受け止める必要はありません。そうではなく読者一人一人がそれぞれの感じ方を探していく、そんなイエス様のお誘いのようにも受け止められるのです。

ようこそ大森聖アグネス教会へ



大森聖アグネス教会は、明治44年、JR大森駅近くの信徒の家で始まった家庭集会から、大正4年聖アンデレ教会出張講義所、大正9年大森聖公会新伝道所を経て、大正14年大森聖公会として認可を受け、昭和31年現在の大田区南馬込に移転、昭和61年大森聖アグネス教会に名称変更し、今年創立97周年を迎える事となりました。

この辺りは大正の終わりから昭和の初めにかけて、多くの文人が移り住み「馬込文士村」と呼ばれ大変静かな環境に恵まれた地域です。

毎主日、歴史を刻んだ温もりがある木造建築の聖堂に30〜40人の信徒が集まり、落ち着いた雰囲気の中で礼拝を捧げます。礼拝後は、ホールで皆で昼食をいただきます。がら交わりの場を持ちます。

「牧師が出来る事は牧師が、信徒が出来る事は信徒が」を合言葉に、一人一役以上を目標に、礼拝奉仕、日曜学校、昼食作り等、多彩な教会の奉仕活動グループにそれぞれが自主的に参加し活動しております。

一方で、「開かれた教会・地域との関わり」を目指して話し合いを重ねる中で、



年で早や6年を経過しましたが、順調に参加者も増えております。

又、近年、貧困や格差の問題が社会問題化する中で、子どものみならず世代を超えた「孤食と居場所探しの問題」に教会としてどう向き合



うのか検討する中で、「南馬込アグネス子ども食堂」を昨年12月から、毎月第2土曜日の昼食を提供する事で立ち上げました。どれだけの方が参加いただけたか不安の中での船出でしたが、会場のホールに溢れるくらいの参加者で驚きと安堵で胸をなでおろしました。この取り組みは地域のボランティアの方々と共に活動する事を柱として参加を呼びかけ、「地域の居場所」としての場を築いていきたいと考えております。

その他、「講演会・勉強会」等を、「アグネスカルチャープログラム」として、地域の方々にも公開し参加を呼びかけております。

皆様、機会がございましたら、是非当教会をお尋ね下さい。お待ちしております。

(ミカエル 伊藤憲治)

《信徒リレーエッセイ》

夢

聖パトリック教会

松本 利勝

初夢。わたしが誰かに提案しているのです。「どうしても映画にしたい物語があります。主人公は20世紀初頭、アメリカババージニア州に生まれ、幼くして父を失い、母に育てられ、生涯己の思いではなく、ただひたすらに主の道を伝え、日本聖公会の礎を築いた人。言うまでもなくウィリアムズ主教、その人です。

画面は白黒かセピアでしょうか。製作費は教会関係者を募りましょう。俳優、女優陣も、ナレーションもすべて奉仕による出演。製作スタッフ、音楽もしかりです。皆を突き動かすのは、師の生涯を通して語られる主の御心に思いを馳せる力と聖霊の導き。

それを教区フェスティバルの礼拝の後に上映するので、聖公会存在の意味、教区という組織の意味を今こそ、皆で師から学びたい、そう思いませんか。映画をそのきっかけにできないでしょうか。」

映画「沈黙サイレンス」の影響でもありません。夢です。

【定年退職に際して】

17年間を振り返る

司祭 鈴木裕二

聖公会神学院を修了し、聖職候補生として八王子復活教会での勤務を命じられたのが2000年4月でしたので、定年を迎えるこの3月末まで、勤続17年ということになります。



他の聖職の定年時期に比べ、17年というのは短いと思いますが、その分神様から濃厚に様々なことを与えられました。

八王子では聖堂・会館の建て替えをしましたが、資金も建築イメージも、何もないところからのスタートでしたのでかなり大変でしたが、振り返れば貴重な経験だったと思います。また、八王子には幼稚園がありました。園児と保護者との関係はともかく、教職員間の複雑な人間関係を改善するよう努力しましたが、すべて宣教のためという使命感を持ちながら何とかチャレン職、後に園長職を務めてきました。

17年間、牧師として定住したのは3教会、管理牧師として関わったのは3教会です。牧会をしたいと聖職の道を志した私としては、特に大切にしたのは信徒訪問です。教会ではゆっくりお話しできない分、ご自宅ではお気持ちを感じ取りとお聴きすることができました。八王子復活教会と真光教会ではほぼ100%、名簿上の信徒を訪問しました。八王子も真光も、テリトリーは広大で、クルマを使うにしてもカーナビのない時代だったので、よくできたものだと思います。教会から遠く離れた信徒宅を訪れるにつれ、その方の教会に通うご苦労を感じ取ることができました。目白聖公会では信徒訪問が思うようにいかなかったことが残念です。目白は都心で便利な分、教区事務所が近くなったため、真光時代に任命された教区主教チャブレンに加え、総主事に任命されてしまいました。聖バルナバ教会の管理も加わり、計4枚の辞令書による仕事は大変ハードになりました。その結果、体のあちらこちらに不具合が生じ、特に昨年は計45日間も入

院を余儀なくされ、教会の信徒をはじめ皆様にご迷惑をかけてしまいました。定年を間近にして、70歳の壁が目の前に高く厚く建てられたように感じました。

これから東京教区は再編成に向けてなお一層大事な時期となります。神様が望まれる教会として、信徒と聖職が一致して良い方向に進んでいくことができるようお祈りします。

生涯一語

クリストに倣いて

司祭 田光 信幸



定年退職の時を迎え、一度限りの人生の歩みを振り返ると沢山の過ちや失敗がよぎります。「過ちには寛容で失敗には厳格ではだめですよ。その逆でなければ聖職の仕事は祝福されません」という聖職按手の時の老司祭の言葉が忘れられません。

高校生の時に洗礼を受けらるまで、幼稚園児の時の大人の礼拝の手伝いからアコライト・聖歌隊、そして高

校の寮生活での早朝聖餐式のサーバーなどを通して、徐々に教会と自分との繋がりが確かなものになりました。信仰とは、『存在への勇氣』であり、『神への誠実』を尽くす喜びであり、「人生の歩みをクリストに倣って進む」という教えに感動して聖職への道に受け入れていただきました。

神学院を卒業してからの教役者としての教会生活も40数年が経過しました。13の教会の牧師・管理牧師をし、それぞれの教会に独自の慣習があり、交わりの多様性がありました。と同時に、その多様性を貫いて相互に結びつける一致と協働の繋がりがありました。多様性と一致の結びつきの豊かさこそ教会の原動力だと感じます。

教会の働きに併行し、韓国での宣教協働、社会の課題としての部落解放・人権確立、憲法擁護の活動にも携わりました。その活動の中で、全国各地を巡り、日本の諸宗教者、社会・政治運動に取り組む人々など、社会の様々な状況で生活する人たちとの出会いの機会

が与えられました。「万民救済」「正義と平和」「いのちあるかぎりともに生きよう」を共通理念として、違いを超えて結び合う大切さを教えられました。教会という世界だけではなく、人間生活のあらゆる場面で、多様性を認め合って尊重し、一致を生み出す愛と希望を持ち合うことが正義と平和を築く力であると気づかせていただきました。

すべての人びとの多様性が尊重され、正義と平和を希求する一致と協働の結び合いは、「聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続ける(ロマ15:4)」という教えに励まされていくことです。教会の過去・現在・未来を通して私たちの希望の要として「クリストに倣って」進む働きをしていかなければなりません。主の聖霊のみ力によって清められ、聖霊の知恵によって足らざるところが補われ、主のみ教えによって過ちがただされ、神の栄光が輝かされますように、ともに祈り、ともに力をあわせ、忍耐と希望をもって進んでいきますよう。

感謝とともに。

モニカ会便り

海外の留学生への支援

モニカ会会長 佐藤 正光

世界のグローバル化が進む中で、教会においても海外で神学を学ぶことが必要となっ
てきています。モニカ会は「聖公会の神学校で学ぶ東京教区の聖職候補生及び志願者が、志を持って海外で学ぼうとす
ることもまた時代の流れに沿ったものであると認識し、海外留学して学位の取得等を目指す聖職候補生及び志願者に積極的に支援を行ってゆきたいと考える」を趣旨として、昨年11月20日の幹事会で、海外で勉強する聖職候補生と聖職候補生志願者に対して国内の聖公会の神学校に在籍する学生と同様に、支援を行うことを決定いたしました。
これにより月額7万円の図書費（家族がある場合には家族費月額2万円を追加）を支給します。審査方法は、推薦教会よりの申請を受けて常任幹事会で審議、幹事会で決定と
します。そしてその最初の支

援者に、聖マルコ教会の中村真希聖職候補生志願者が決まりました。中村さんからのメッセージをご紹介します。
「聖マルコ教会の中村真希と申します。
現在ローマ教皇庁立聖書学研究所の博士課程に在籍し、旧約聖書を中心に勉強しています。ローマでは、ローマカトリック教会の方々との出会いや、アングリカンの教会生活での交わりを通して、勉強以外にも様々なことを学んでいます。私は2013年に東京教区の聖職候補生志願生として認可されました。学業修了後は、ローマで学んだこと・経験したことを東京教区・日本聖公会・そして日本の教会と社会のために精一杯還元していきたいと思っています。今回モニカ会から支援をいただくことになり、改めて東京教区の一員として応援していただいていることに心から嬉しく思うと同時に、その責任に身も引き締まる思



いです。今後とも感謝をもって、しっかりと歩んでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。」

世界の聖公会ニュース(3)

米国聖公会の指導者達、トランプ大統領の移民政策に対し意見

マイケル・カリー総裁主教は「我々の移民定住プログラムは神のみ顔を示す力強い事業である。私はトランプ大統領に、移民は長期間の厳格な審査の上で入国していることを認識し、移民定住プログラムを継続するよう要請した。」と述べた。聖公会移民ミニストリー (EMM) 代表マーク・ステイブソン司祭は「トランプ大統領は移民規制を安全な国へのステップと位置づけているが、孤立は我々を安全にはしない。異なる人々への恐れは我々を疑いと怒りの密室に閉じ込め、我々はキリストの愛の優しさから離れて凍り付いてしまうだろう」と述べた。EMMは米連邦政府との契約のもと難民定住支援を行う9つの機関のうちの1

つであり、活動資金の多くはこの契約を財源としている。

ギリシャ聖公会、難民孤児支援活動に緊急支援

ギリシャ聖公会は、英国国教会の宣教団体 USPG と連携して、アテネの難民孤児支援施設であるヘスチア・ボーイズ・ホステルに対し経済支援を行った。ヘスチア・ボーイズ・ホステルはギリシャ正教会により2011年に創設さ

れ、アフガニスタンやシリア等の難民孤児に対し宿泊や職業訓練等の支援を行っているが、巴からの財政支援が打ち切られ閉鎖の危機にあつた。ギリシャには約2300人の孤児がおり、そのうち1000人以上は路上等で生活しているといわれている。

次回 イースター号は4月16日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (二十九)

1. 変容貌

牧師「ペトロたちは、山の上でイエスの姿が変わるのを目撃しました。

これを『変容貌』といいます」

信徒「先生、私も同じような人を目撃しました」

牧師「どうのことですか」

信徒「この前、昔格好よかった友人に久しぶりに会ったのですが、すっかり姿が変わって『変な容貌』になっていたんです」

2. 逃げた弟子たち

信徒A「イエスが捕まったとき、弟子たちはみんな逃げちゃったんだよね」

信徒B「そうなんだ、でも逃げて命が助かったから復活のイエスに出会えたし、その後みんなが宣教して、今の教会につながるんだよ」

信徒A「なるほど、まさに「逃げるは恥じだが、役に立つ」というわけですね」

3. 責任

信徒A「神さまも大変だよ。言うことをきかず罪ばかり犯す人間を赦し、辛抱強く愛し、最後まで見守り続けるんだから」

信徒B「ほんとにそうだね、でも、それは法律上仕方ないんだよ」

信徒A「えっ、どういうこと？」

信徒B「だって、それが“製造物責任法”ってやつだからね」